

TOPICS5

セカンドアルバム『Risonanze-響鳴-』リリース

Rioさんにとって約10年ぶりのアルバム『Risonanze-響鳴-』が、2025年1月24日にリリースされます。7月に2日間にわたってコピスみよしでホール収録を行い、“響き”にこだわって作った渾身のアルバムです。



録音・プロデューサーを務めてくださった株式会社妙音舎の小野啓二さん。



(左から)ピアノ・編曲の濱野基行さん、編曲の山本清香さん、チェロの有梨清理さん。最高のメンバーです!

Rioさんに一問一答!

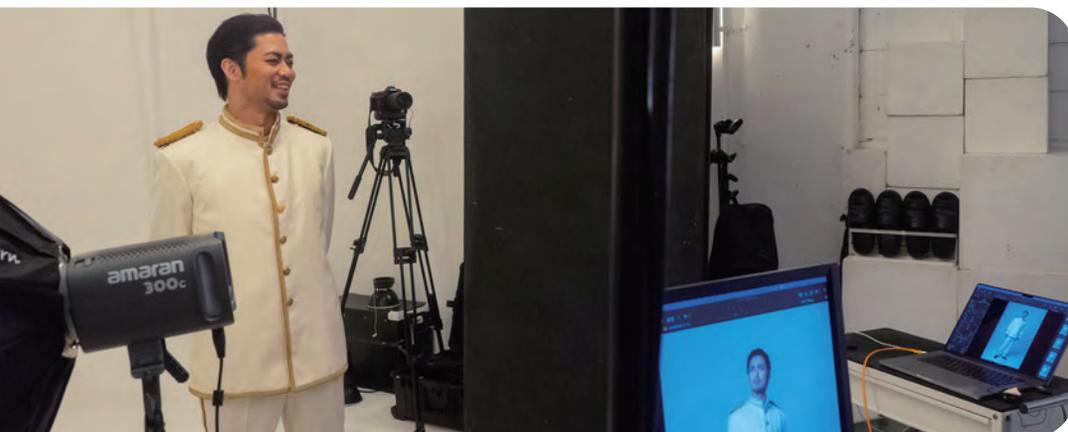
各曲に対して一言コメントをもらいました。

1. カロ・ミオ・ベン Caro mio ben 「基本中の基本」
2. オンブラ・マイ・フ Ombra mai fu 「聖なる歌」
3. イデアーレ Ideale 「美しくて哀しい」
4. つれない心 Core 'Ngrato 「有名なビッグナンバー」
5. Dicitencello vuie 「哀愁と色気」
6. 星は光りぬ プッチーニ:トスカより 「処刑の前日」
7. 落葉松 「日本の心」
8. 『ジキル&ハイド』This is the moment 「時が来た!」
9. 『Chess』Anthem 「人間と大地への讃歌」
10. 『オペラ座の怪人』Music of the Night 「お待たせしました!」
11. 『Les Misérables』Stars 「もうここでしか聴けない」
12. 『The Love Story〜ある愛の詩〜』 「号泣必死」
13. 『セント・オブ・ウーマン』Por una cabeza 「軽やかなタンゴ」
14. 『ニュー・シネマ・パラダイス』愛のテーマ 「郷愁」
15. 『ゴッドファーザー』愛のテーマ 「お待たせしました!part.2」

TOPICS6

リーディング・オペラop.2「蝶々夫人」ビジュアル撮影

プッチーニ没後100年を記念して上演されるリーディング・オペラ「蝶々夫人」。アメリカ海軍士官のピンカートン役のRioさんは、ビジュアル撮影で「ニヒルな感じ」を求められていました。2025年3月をお楽しみに!



MEINUNG マイノング

ファンクラブDerMond10周年を記念して、10年の振り返りインタビューを実施。Rioさん自身の変化、初Festの思い出、そしてこれからのファンとの関係性について真摯に語ってくれました。

★FC発足10周年おめでとうございます。Rioさんにとってはどんな10年でしたか？

歌と芝居は“今という瞬間を生きる”という意味では同じものなのかもしれない、そう思えるように変化してきた10年でした。以前は頭のどこかで歌うことと演じることを別ものだと捉えていた部分があったんです。ミュージカルをやるとき、自分は歌をやってきた人間だからそこで培ったもので表現をすればよかったけれど、まず大切にしなければいけないのは芝居だということに気がきました。そうして芝居への理解が少しずつ深まってきた頃に、歌も同じことなんだなって感じるようになったんです。歌と芝居は表現方法こそ違うけれど、どちらも心で感じたものや放ちたいものがある、それを自分の身体を通して表現するというのは同じこと。そんなふうに、いつのまにか歌と芝居への考え方がリンクしてきた感覚があります。

★ご自身の歌声の変化はどう感じていますか？

初めての『レ・ミゼラブル』の製作発表の歌を聞くところから、デビューした頃は本当にどババツシという感じ(笑)。それが段々と高い声に変わってきています。今日も発声練習をしてきたけれど、高い音の方が出しやすくなっているんです。歳を重ねた分、音楽の捉え方も変わってきていると感じます。若い頃は感じられなかった音楽の美しさや色気がわかるようになったのは、人生経験なのかなあ。20代は青かったり尖ったりしていたけれど、その10年いろんな方たちと一緒にいるんな経験をさせてもらって、それらが血肉になっているのだと思います。

★2015年には、ファンクラブイベント「DerMond Fest」第1回が開催されました。

2月の寒い時期に、恵比寿のアート・カフェ・フレンズで開催しましたね。クラシックの人たちがよく使うサロンのような空間で、100人も入らないくらいの広さ。ピアノの前にスツールを置いて、歌ってMCをしました。懐かしいなあ。そこで改めてファンの方々への存在を認識しました。当時は口が達者じゃなかったんで、MCをするのもヒヤヒヤ(笑)。最初はマイクで歌っていたけれど、段々と今のように生声で歌うクラシカルな趣のイベントになっていきました。

★ファンとの関係性は、今後どうありたいと思っていますか？

最近そのことを考えていたんです。もっとファンの存在を感じたいなって。コロナ禍をきっかけに出待ちなどもなくなって、ファンの声を直接聞く機会が減っているでしょう。ファンクラブイベントを開催しても、形式上しよがないところもあるんだけど、どうしてもステージと客席の間に境界線があるんです。その境界線をなくして、もうちょと触れ合えるようになるといいのかなあ。

例えば「歌を聴いて力をもらいました」とか、そういうファンからの言葉って実はものすごく力になるんです。それこそが我々芸術家の力の源。音楽や芝居がなくなったら人は生きていけますよね。でもなぜ存在しているのかといたら、そこから感動や活力をもらって明日から頑張ろうという気持ちになれるから。そのために僕たちは芸術活動をしています。そのことは自分自身、肝に銘じなきゃいけないなとも思っています。ファンクラブというものが僕を応援してくれる人たちの集まりであるならば、ファンの率直な声をもっと聞きたいし、もっと距離を縮めていきたいなって。DerMondistのみんな～！実は私、そういうことも考えているんですよ(笑)。

★ここから先の10年はどう過ごしていきたいですか？

佐賀県の鍋島藩に葉隠(はがくれ)という教えがあります。新渡戸稲造の『武士道』という本の基になった考え方なのですが、その中の「端的只今(たんできしこん)」という教えが、これまでの自分の生き方、歌や芝居に対するスタンスに通ずると思うんです。それは、今まさにこの一瞬に全集中してすべてを注ぐというもの。今この瞬間をどう過ごすかで、どんな未来がくるかは変わってくる。一瞬一瞬の今を積み重ねていくとその先に未来があって、それを振り返ると過去がある。だからこれからも一步一步、歩み続けるだけです。今という瞬間をどう積み重ねていけるかがすごく大事。DerMondistのみんなも一緒に、いい歳の重ね方をしていきたいと思います。